

DC1NULNULNULNULNULNULNULNULNUL SOHNULNULNULNULNULNUL
NUTNUTNUTX7FEENUT!SOHNULNUTX7FEENULNULNULCY7FEENUT~SOHNULNULY7FEENULNULNULZ7FEENUT
ルSOHNULNULZ7FEENULNULPADEOTD[7FEENUT;STXNULNUL[7FEENULNULNUL%D\7FEENULSTXNULNUL
\7FEENUNULNULDETc]7FEENUT·NULNUL]7FEENULNULNULZ7NUTNUTNUTNUT
5ETXNULNULNULNULNULNULNULNULNULNULb7FEENUL6ETXNULNULb7FEENULNULNUL@NULNULNULNUL
bETXNULNULNULNULNULNULNULNULNULNULc7FEENULホETXNULNULc7FEENULNULNUL/Dd7FEENULvEOTNULNUL
d7FEENUTNUTNUTpCNULNULNULNUL·NUTNUTNUTNULNULNULNULNULNULNUL17FEENUT·NULNUL17FEENULNULPADDc3
Dm7FEENUT·NULNULm7FEENULNULタ(Dn7FEENULrENONULNULn7FEENULNULNULDELCo7FEENUT·NULNUL
o7FEENUTNUTNUTSYNDNUTゆめまぼろしに浮き漂うこと千年≡。

栄華の証したる『結界』は砕け
人は穢れた外界へと放たれた。NUT腐れた大地の上で生きる術を持たず
民衆はもはや、無数の異形どもの
糧となるより他、無かった。NUTもはや止めることは叶わぬと
思われた人の世の落日≡。
それを押し留めたのは
一つの宝珠の力であった。NUTあまなく異形どもを灰と化し
地に満ちた穢れた澱を押し流す
白き瑞光を目にしながら
人々は再び千年の栄華に思いを馳せた。NUT=光りに惹かれた者の目に
その陰がうつることはない。NUT闇は、まばゆい光りの陰に潜み
かりそめの平安を打ち破ろうと
密かに胎動していた…。NULNUL落花の如く≡。
人々の命は散り乱れていった。NUT崩壊し打ち捨てられた都から
僅かながら逃げ延びた民衆も
腐れた大地とはびこる妖鬼により
徐々に蝕まれていった。NUT白珠の恩恵を以ってしても
その流れを押し留めることは叶わず
空しく果ていく命を目に焼き付けながら
晴明は、ただ一途に頼光の行方を追った。NUT立ち込める闇を切り裂く刃を
再び手にするために…。NULNUL死より芽吹くものもある≡。
都を覆う呪詛は消え去り
散り散りになっていた民衆は
再び都へと集い始めていた。NUTあたかも死人達の墓標であるかのように
広がっていた瓦礫は、徐々に切り崩され
少しずつではあるが
都は元の形を取り戻そうとしていた。NUTだが、白き災いは
未だ去ったわけではない。NUT立ち込める群雲の裏側に
月が清かに在ると同じに
密やかに…しかし確かに
その災いは育まれていた…。NUTその災いは育まれていた…。NUTめる群雲の裏側に
月が清かに在ると同じに、
密やかに…しかし確かに
その災いは育まれていた…。NULNULNULNULNULNULNULNULNULれていた…。NULNULNULNULNULNULNUL